

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 特別支援教育第171号

—幼稚園，小・中・高等・特別支援学校対象—

平成25年10月発行

### 自閉症児への効果的な視覚支援の進め方

自閉症児については、特性に基づいた指導・支援が必要とされ、様々な指導・支援が行われている。特に、聴覚認知よりも視覚認知が優位である場合が多くみられることから、学校や家庭等においては視覚支援を用いることが多い。しかし、写真カードや絵カードなどを示しても、見てほしい部分にうまく注目できなかつたり、手順を示したカードを渡しても、手順どおりに活動できなかつたりするというように、指導の効果が十分に現れていない場合がみられる。

そこで、本稿では、自閉症児のシングルフォーカスという特性に視点を当てた、視覚支援の効果的な進め方について述べる。

#### 1 自閉症の特性について

自閉症は、中枢神経系に何らかの障害があることが要因であるとされ、3歳位までに現れることが多い。他人との社会的関係の形成の困難さや言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわるのが特徴である。

自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものを高機能自閉症といい、その中で、話し言葉の遅れがないものをアスペルガー症候群と呼ぶことがある。

また、自閉症児には、視覚優位性、シングルフォーカス、感覚知覚の過敏さや鈍感

さ、応用の困難さ、情動のコントロールの困難さがみられることがある。

#### 2 シングルフォーカスについて

シングルフォーカスとは、一度に複数のことを処理することが難しかったり、多くの情報の中の一部に反応してしまったりすることである。

例えば、図1のように家庭で体育に必要な服装等を準備しようとした際に、帽子のみに注目してしまい、近くにあるほかの服や室内用運動靴をかばんに入れ忘れてしまうようなことがある。

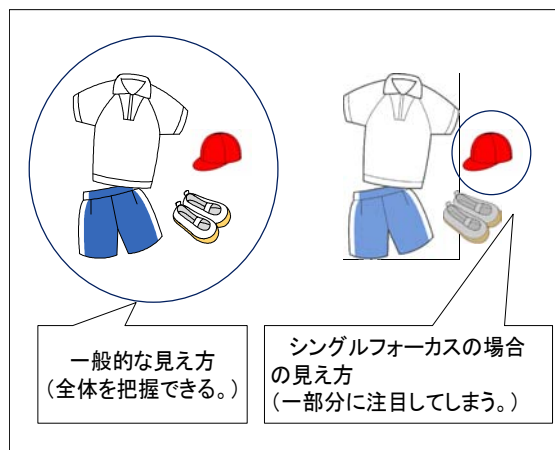


図1 シングルフォーカスの見え方の例

視覚支援については、様々な方法があるが、自閉症児のシングルフォーカスという特性を踏まえて、一度に提示する情報の量を一つにするというような工夫などを行うことが大切である。

### 3 シングルフォーカスを踏まえた自閉症児への視覚支援の実際

#### (1) 教室掲示等の工夫

図2は、ある学級の黒板周りの様子を図示したものである。この学級では、自閉症児が授業中に黒板横の本棚の本を取り出したり、掲示物が曲がっていることが気になり、貼り直そうとしたりするような行動がみられた。また、板書をノートに書き写す際に、時間割や持ってくるものなどの、授業に必要な情報まで書いてしまう様子がみられた。

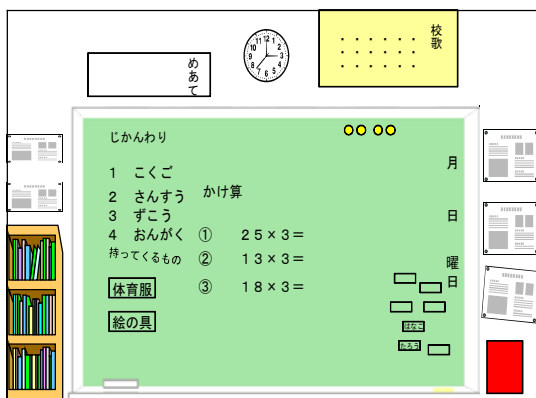


図2 黒板周りの状況（改善前）

このような教室掲示においては、次のようなことが課題として考えられる。

- ・ 黒板周りに刺激となる情報が多い。
- ・ 必要でない情報は隠したり、側面に掲示したりする必要がある。
- ・ 時間割は必要な情報であるが、黒板の横に掲示することで、黒板を有効に活用できる。

そこで、図3のように、黒板周りの刺激を少ない環境に変更することで、黒板に注目しやすくなり、落ち着いて授業に参加することができるようになる。

このように、板書や教室の掲示については、不必要な情報を外し、注目させたい部分だけを分かりやすく示すというような、視覚支援を行うことが大切である。

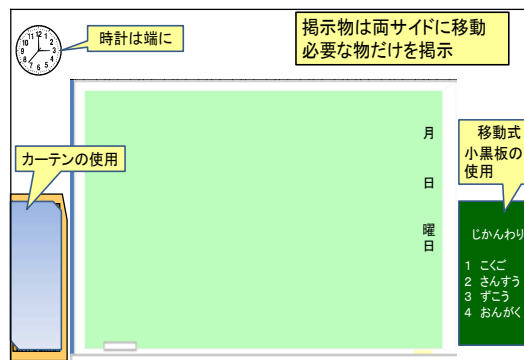


図3 黒板周りの状況（改善後）

#### (2) 写真カード等の工夫

自閉症児に情報を伝えたり、やり取りをしたりするためのツールとして、写真カードや絵カードが使われることがある。

図4は、歯磨きの際に、「歯ブラシとコップを持ってきて。」という言葉掛けとともに提示した写真カードである。この写真カードには、コップと歯ブラシが同時に映り込んでいた



図4 コップと歯ブラシの写真カード

のみに注目してしまい、歯ブラシだけを持ってくることがある。

そこで、図5のように注目させたいコップだけと歯ブラシだけが映っている写真カードをそれぞれ作成し、1枚ずつ提示することで、歯ブラシとコップをそれぞれ持ってくる



図5 改善した写真カード

ことができるようにすることが大切である。

このように、写真カードや絵カードを作成する場合は、背景を取り除いたり、

必要な情報のみを見やすくしたりするよ  
うな工夫を行い、注目すべき点を明確に  
示すことが大切である。

(3) 文字カード等の工夫

写真や絵と同  
様に文字も有効  
な視覚支援の  
ツールである。

図6は、掃除  
の手順を示した  
カードである。

複数の手順が示  
されているが、  
一つ一つの手順  
が箇条書きで短  
く示してあり、

順番についても番号を表示してあるた  
め、それぞれの活動が明確になっている。  
実態に応じて、図7のように終わった部  
分を消していくと、次に行うことがより  
明確になる。

このように、文字を使用する際も、具  
体的で分かりやすく提示するために、箇  
条書きにしたり、短い文にしたりする  
といった工夫が大切である。

【掃除の手順】  
1 ほうきを棚から取り出す。  
2 ほうきを持って、掃除場所に行く。  
3 ほうきを使って、ゴミを集める。  
4 15分間、作業に取り組む。  
5 ほうきを棚に片付ける。

図6 箇条書きの手順1

【掃除の手順】  
~~1 ほうきを棚から取り出す。~~  
~~2 ほうきを持って、掃除場所に行く。~~  
~~3 ほうきを使って、ゴミを集める。~~  
4 15分間、作業に取り組む。  
5 ほうきを棚に片付ける。

図7 箇条書きの手順2

(4) 得意な情報処理を活用した提示の工夫  
作業の手順などの写真カードや絵カー  
ドは、全体の流れが見通せるように、図  
8のような手順を一覧式にして提示する  
ことが多い。その場合、横の提示であれ  
ば左から右に、縦の提示であれば上から  
下に並べることが多い。

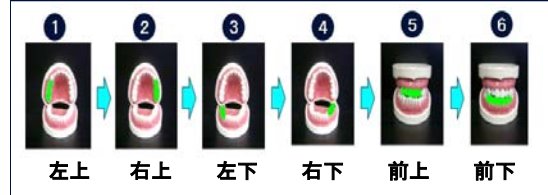


図8 一覧式の歯磨きカード

一方で、一  
覧式では情報  
が多すぎて分  
かりにくい自  
閉症児もいる  
ため、その場  
合は、手順を



図9 めくり式の歯磨きカード

一つずつ提示し、めくりながらその都度、  
手順を確認できるような工夫(図9)も  
必要である。

このように、一人一人の得意な情報処  
理を活用した提示の工夫をすることも大  
切である。

4 実践例(シングルフォーカスの特性を踏まえた、教材・教具の提示の工夫)

(1) 実態

A児は、小学校4年生男子で、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。

日常生活における挨拶や経験したことについては言語での理解ができ、二・三語文での会話ができる。また、平仮名を読んだり、書いたりすることができ、短い文であれば内容を理解することができる。

言葉掛けなどの言語での指示が多くなると混乱する様子がみられる。手順を一つずつ確認すると活動への見通しがもちやすい。

(2) 学習内容

生活単元学習 単元「ホットケーキを作ろう。」

A児にとって、初めての活動となる。A児の調理活動への興味・関心は高い。本単元では、作る活動を3回設定しており、1・2回目は教師と一緒に手順を確認しながら作り、3回目はできるだけ一人で作り、学級全員で会食を行う計画である。

(3) 実際

【1回目】

担任が、黒板に作り方の手順を写真と文字で提示し、一つずつ手順を確認した。

ところが、A児はなかなか活動せず、担任は「よく見て。」と黒板の手順カードを指差したり、「つくろうね。」と言葉を掛けたりした。しかし、A児は教室の中を歩き回り、落ち着かない様子であった。裏返して完成が近づくと、ホットプレートに近づき、シロップを掛けたり、バターを塗ったりした。

放課後、教室全体が映るように撮影していたVTRを確認しながら、本時を振り返ったところ、黒板に貼った写真カードがA児には大きすぎて、全体を把握できず、特に、写真が1列に並び切れていなかったため、シロップやバターを塗る活動へ注目が偏っていたことが確認された(図10)。



図10 黒板の掲示

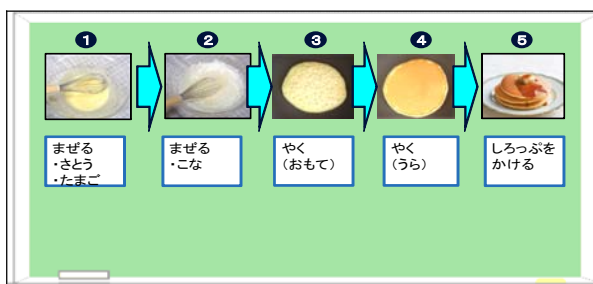


図11 黒板の掲示(改善後)

【2回目】

そこで、図11のように番号と矢印を追加し、文字の量も精選した手順カードを黒板に提示し、一連の流れが見通せるようにした。写真カードと文字カードを1枚ずつ確認し、A児に黒板に貼らせたところ、カードを指差しながら、文字を読んで確認することができた。一つずつの手順について理解し、教師と一緒に作ることができた。

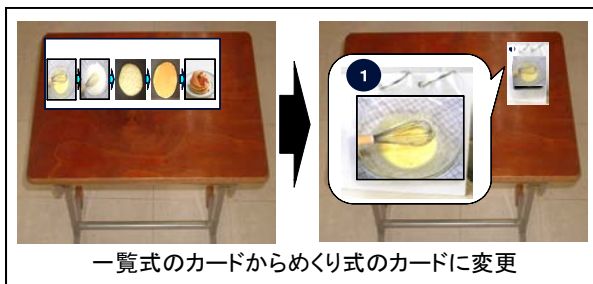


図12 手元の個人用カードの工夫

【3回目】

A児は、手順ごとに黒板を確認していたため、小さくしたカードを机上にも準備したところ、集中して活動することができた。

しかし、小さくなった分、複数の手順を同時に見てしまい、順番どおりに作ろうとしない様子がみられたため、図12のように一覧方式から、準備していためくり方式に手順カードを変更した。その際、写真のみを示し、「まぜる」、「やく」などの文字情報については、A児が困った状況になったときのみ提示した。

A児は、3回目の活動において、めくり方式の手順カードを確認しながら、最後まで集中して一人でホットケーキを作り、会食することができた。

自閉症児の指導・支援において、視覚支援は有効である。その際、自閉症児のシングルフォーカスといったような特性を知ること、具体的で、分かりやすい効果的な視覚支援を行うことができる。

そのためには、一人一人の実態把握を的確に行い、課題を明確にするとともに、個に応じた教材・教具等を作成・活用することが重要である。また、実施後の評価・改善を行う

ことで、よりよい指導・支援を行うことが期待される。

—参考文献—

- 鹿児島県総合教育センター『研究紀要 第116号』平成24年3月
- 藤田理恵子, 和田恵子 著, 服巻繁 監修『自閉症の子どもたちの生活を支える—すぐに役立つ絵カード作成用データ集』2008, エンパワメント研究所

(特別支援教育研修課)